



新集 世界の文学

19

トルストイ

戦争と平和 III 原 卓也訳

中央公論社

トルストイ

訳者 原 卓也

昭和43年7月1日初版印刷

昭和43年7月10日初版発行

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

戦争と平和 ■

3

付録

『戦争と平和』に関して数言

492

全卷要目

502

戦争と平和

Ⅰ

第三部（つづき）

第三篇

—

運動の絶対的な連続などということは、人間の知恵では理解しえない。いかなる運動にせよ、任意に選んだその運動の単位を人間が検討するに及んではじめて、その法則が理解しうるようになるのである。が、それと同時に、連続的な運動をこのように勝手に断片的な単位に区分することから、人間の誤解の大部分は生ずる。

アキレスは亀の十倍の早さで歩くにもかかわらず、前を歩いてゆく亀に決して追いつけないという、いわゆる古人の詭弁は有名である。つまり、アキレスが自分と亀とをへだてている距離を歩き終わるうちに、亀はその距離の十分の一だけ先に進み、アキレスが十分の一のその距離を歩くうちに、亀は百分の一だけ先に進むという具

合に、無限につづくというわけだ。この問題は古人には解決不可能と思われていた。アキレスは決して亀に追いつけないという結論の無意味さは、要するに、アキレスの運動も亀の運動もたえまなく行なわれているにもかかわらず、運動の断片的な単位を勝手に認めたことから生じたのである。

運動の単位をどんどん小さくしていても、問題の解決に近づくだけで、決して解決を得ることはない。ただ、無限に小さな量と、そこから生ずる級数を十分の一まで認め、その等比級数の総和を出して、はじめて問題の解決を得るのである。数学の新しい分野は、無限に小さな量を扱う技術を達成したので、いまでは運動のもっと複雑な他の問題でも、解決しえぬと思われていた問題に対して答えを出してくれる。

古人の知らなかったこの数学の新しい分野は、運動の問題を検討する際にも、無限に小さな量、つまり、運動の主要条件たる絶対的な連続性が再現できるような量を認め、ほかならぬそのことによって、人間の知恵が、連続する運動のかわりに運動の個々の単位を検討しているためにおかさざるをえない、必然的な誤りを正してくれるのである。

歴史上の運動の法則を探求する場合にも、これとまったく同じことが生ずる。

人類の運動は、数限りない人間の自分勝手な意志から発して、たえまなく行なわれるものだ。

この運動の法則をつかむのが歴史学の目的である。しかし、あらゆる人間の勝手な意志の総和から生ずるたえまない運動の法則をきわめるために、人間の知恵は任意の断片的な単位を仮定してしまふ。歴史学の第一の方法はこうだ。つまり、いかなる事件にも始まりなどないし、ありうるはずもなく、一つの事件は常に別の事件から連続して生ずるにもかかわらず、一連の連続的な事件を任意に選びだし、他の事件とは切りはなして検討しようとするのである。第二の方法は、大勢の人間の意志の総和が一人の歴史的人物の行為のうちに表現されることなど決してないにもかかわらず、皇帝とか司令官とかいう一人の人間の行動を、大勢の人間の意志の総和として検討しようとするのである。

歴史学は進歩するにしたがつてたえず、検討するためにとりあげる単位をますます小さくしてゆき、それによって真実に近づこうと努めている。しかし、歴史のとりあげる単位がどんなに小さかろうと、他から切りはなした単位を認めたり、何らかの現実の始まりを認めたり、すべての人間の勝手な意志が一人の歴史的人物の行動にあらわされると認めたりすることが、それ自体いつわりである、われわれは感ずるのだ。

歴史学のあらゆる結論が、べつに批評の側から努力しなくとも、何一つあとに残さずにはかなく崩れさつてしまふのも、つまり、批評が観察の対象として、大小の差こそあれ、断片的な一単位をとりあげるからにはかかない。そしてまた、選ばれた歴史の単位なるものが常に任意である以上、批評も常にそれを選ぶ権利を持つていゝるわけである。

ただ、観察のために無限に小さな単位——歴史の微分、つまり人々の同種の意向を仮定し、これを積分する技術（それら無限に小さな単位の総和を得ること）を獲得することによつてはじめて、われわれは歴史の法則の究明を期待しうるのである。

ヨーロッパにおける十九世紀初頭の十五年間は、数百万の人間の異常な運動をあらわしている。人々は各自の日ごろの仕事を放りだして、ヨーロッパの一方の端から他方の端へ殺到し、略奪し、互いに殺し合い、凱歌をあげ、絶望し、数年間にわたる生活の流れ全体が変わつて、一つの激しい運動となり、それが最初のうちは増大しつづけ、やがて衰微していったのである。この運動の原因は何か、どのような法則によつてそれが生じたのか、と人間の知恵はたずねる。

歴史家はこの質問に答えて、パリの数多い建物の一つ

における数十人の人間の行動や演説を述べ、それらの行動や演説を革命という言葉であらわす。そしてさらに、ナポレオンや、彼に共鳴あるいは敵対していた数名の人間のくわしい伝記を示し、その人々の一部が他に与えた影響を語り、こういう理由でこの運動は生じた、これがその法則だ、と論ずるのである。

しかし、人間の知性はこんな説明を信ずることを拒否するだけではなく、この説明の方法は正しくない、なぜならこの説明でもっとも弱い現象がもっとも強い現象の原因と思ひ誤られるからだ、と端的に告げさえする。いろいろな人間の勝手な意志の総和が、革命をも、ナポレオンをも生みだしたのであり、それらに堪え、撲滅したのも、やはりこうした勝手な意志の総和にほかならない。

『しかし、侵略の行なわれたときには、常に侵略者がいたのだし、国家に变革の生じたときには、常に偉大な人物がいたのだ』と歴史は語っている。たしかに、侵略者の現われるたびに戦争があつた、と人間の知性は答えるのだが、それはべつだん、侵略者が戦争の原因であつたことや、一人の人間の個人的な行為のなかに戦争の法則を見いだしうることを、証明するわけではない。わたしが自分の時計を眺めて、短針が十時をさすのに気づくと、そのたびに隣の教会で祈禱を告げる鐘が鳴りはじめると

が聞こえる。しかし、針が十時をさすと必ず鐘が鳴りはじめるといつて、針の位置がすなわち鐘の運動の原因である、と結論する権利などわたしは持っていない。

機関車の運動を見ていると、必ず汽笛の音が聞こえ、弁の開くのと車輪のまわるのが見える。しかし、そのことから、汽笛と車輪の回転とがすなわち機関車の運動の原因であると結論する権利など、わたしにはないのだ。

農民たちは、晩春に冷たい風が吹くのは、樫の蓄がほころびるからだ、などと言うし、事実、毎春樫の蓄がほころびるころになると冷たい風が吹く。だが、樫の開花のころに吹く寒風の原因はわたしにもわからぬけれど、寒風の原因が樫の蓄のほころびであるという農民たちには、風の力が蓄の影響外にあるという理由だけで、同意することができない。わたしはただ、あらゆる生活現象のうちにある諸条件の符合を見るだけであり、時計の針や、弁や、機関車の車輪や、樫の蓄などをどんなに長時間、どんなにくわしく観察したところで、祈禱の鐘や、機関車の運動や、春の風などの原因はわかるはずがないことに気づくのだ。そのためには、わたしは観察の視点をすっかり変えて、蒸気や、鐘や、風などの運動の法則を研究しなければならぬ。歴史もそれと同じことをせねばなるまい。そして、その試みはすでになされているのである。

歴史の法則を研究するためには、われわれは、観察の対象をまったく変え、皇帝とか、大臣とか、將軍などは放っておいて、大衆を動かす無限に小さな同種の要素を研究しなければならぬ。この方法によつて人間がどれくらい歴史の法則の理解を達成できるか、それはだれも言えないことであるが、この方法にのみ歴史の法則を把握する可能性が存することは明らかである。そしてまた、これまで歴史家たちがさまざまな皇帝や、司令官や、大臣などの行動の記述や、その行動に関する自分の考えの叙述などに払つてきた努力の百万分の一も、まだ人間の知恵がこの方法に対して払つていないことも明らかである。

二

ヨーロッパ十二カ国語の兵力がロシアになだれこんで、ロシア軍と住民とは、衝突を避けながらスモレンスクまで、そしてスモレンスクからポロジノまで退却する。フランス軍はたえず加速度をましながら、行動の目標であるモスクワに向かつてつき進む。目標に近づくにつれてその加速度は、ちょうど落下物の速さが地上に近づくにつれて増大するように、大きくなってゆく。背後には何千キロもの飢えた敵地があり、前方は目標まであと数十キロをへだてるのみだ。ナポレオン軍のどの兵士もこれ

を感じ、進撃は加速度だけでひとりで行なわれる。

ロシア軍のなかには、退却につれて、敵に対する憎しみの気持がますます激しく燃えあがつてゆく。退却をつづけるうちに、軍が結集し、強力になってゆく。ポロジノで戦闘が行なわれる。どちらの軍も崩壊こそせぬがロシア軍は、ちょうど一つの球がもっと勢いよくころがってくる別の球とぶつかつて、必然的にはじき返されるのと同じように、戦闘のあとだちに必然的に退却する。同じく必然的に、勢いよくころがってきたほうの球も、衝突で勢いを失いこそしたものの、さらにしばらくの間をころがり通す。

ロシア軍はさらに百二十キロ、モスクワの後方まで退却し、フランス軍はモスクワに到着してそこで停止する。このあと五週間というものの、戦闘は一度も行なわれない。フランス軍は進撃しようとしないう。致命傷を受けた獣がおびたしい血を流しながら、傷口を舐めてゐる姿にも似て、彼らはなんの手も打たずに、モスクワに五週間もどどまり、突然、なんら新しい理由もないのに退却する。彼らはカルীগ街道に突進し、マロ・ヤロスラーヴェツ(モスクワの西南約二百キロの市)の戦闘であたたび戦場が彼らの手中に帰したのであるから勝利のあとだというのに、一度も本格的な戦闘を行わずに、ますます速度を早めながらスモレンスクに退却し、スモレンスクからさらにヴィルナへ、

ペレジナへ、さらにその先へと退却する。

八月二十六日の晩には、クトゥーゾフも、全ロシア軍も、ポロジノの戦鬪に勝ったと確信していた。クトゥーゾフは皇帝にあててそう書いてもいる。クトゥーゾフが敵を粉碎するために新たな戦鬪の準備を命じたのは、べつにだれかを欺こうとしたからではなく、戦鬪の参加者一人一人が承知していたのと同じように、彼も敵が敗れたことを知っていたからである。

しかし、その晩から翌日にかけて、軍の半ばを失ったという、かつて聞いたことのないほどの損害の報が、次から次へと入るようになり、新しい戦鬪は物理的に不可能であることがわかった。

まだ情報が集まらず、負傷兵の收容も、弾薬の補給も、死者の計算も、戦死した指揮官の後任の任命もされず、兵たちが睡眠も食事も十分とらずにいるうちに、戦鬪を行なうわけにはゆかなかつた。と同時に、戦鬪直後の翌朝、フランス軍は、今や距離に反比例するかのようにな増大した加速度によって、もはやひとりでロシア軍に肉薄してきた。クトゥーゾフは翌日、攻撃するつもりでいたし、全軍もそれを望んでいた。だが、攻撃するためには、それを行なおうという気持だけでは不十分であり、それを行なう可能性の存することが必要であるが、その可能性が存していなかった。一行程だけ退却せざるをえ

なかつた。さらに、同じように第二、第三の行程も退却しないわけにはゆかず、ついに九月一日、軍内の士気は大いに高揚していたにもかかわらず、客観的情勢の力が軍にモスクワの後方に退却することを要求したのである。こうして軍はさらに一行程、最後の行程を退却し、敵にモスクワを明け渡した。

われわれの一人一人が、自分の書齋で地図を前に坐り、自分ならばこれこれの戦鬪ではどのように采配をふるうだろうか、などと思いつくらすのと同じような形で、戦争や戦鬪の計画も司令官たちによって作成されると考えつけている人々にとつては、当然、なぜクトゥーゾフは退却に際してこういうふうに行動しなかつたのだろうとか、なぜ彼はフィーリ(モスクワ郊外の村。現在は市に編入されている)以前に陣地を占めなかつたのかとか、なぜモスクワを放棄したあと、すぐカルーガ街道に退却しなかつたか、などという疑問が生ずるだろう。こういう考え方に慣れた人々は、どんな総司令官の行動も常にそのなかで行なわれる、避けがたい条件を、忘れているか、でなければ知らないのだ。司令官の行動というものは、われわれが書齋にのんびり坐つて、敵味方の兵力もわかっているれば地形もはっきりしているならかの会戦を地図の上で分析し、しかもある一定の瞬間から判断を起こして、勝手に想像するような行動とは、いささかの類似点も持っていないのである。

総司令官は、われわれがなんらかの事件を検討する際に常に想定してかかる、事件の開始、という状況に身をおくことは絶対にない。総司令官は常に、進行中の一連の事件のただなかに身をおいているのであり、どんな瞬間にも決して、現に行なわれつつある事件の意味全体を思いめぐらすことなどできないのである。事件は目立たぬうちに刻一刻と、浮彫りにされてその意義を明らかにしてゆくのであるから、この一貫した連続的な事件の浮彫りのどの瞬間にも、総司令官は、陰謀や、苦勞、依頼心、権力、試案、助言、脅威、欺瞞などのきわめて複雑な駆引きの中心に身をおき、数限りなく提案される、しばしば矛盾し合うような問題に対して答えなければならぬ立場に、たえず立たされているのである。

クトゥーゾフはフィーリに行くずっと以前に、軍をカルーガ街道に進めるべきであったとか、だれかそういう計画を提案した者さえあったとかと、学識豊かな軍人たちはしたり顔でわれわれに語ってみせる。しかし、総司令官の前には、それも特に苦境に際しては、一つや二つではなく、何十という計画が同時に提出されるのだ。しかも、戦略や戦術に立脚したこれらの計画のどれもが、それぞれ対立し合うものばかりときている。総司令官の仕事は、それらの計画の一つを選ぶことにすぎないように見えるかもしれない。しかし、それさえ彼はなしえない

のである。事件と時が待っていてくれないからだ。かに、二十八日にカルーガ街道へ移る提案をされたところ、ところがそのとき、ミロラードウィチの副官がとんできて、今すぐフランス軍と戦闘を開始すべきか、退却すべきかをたずねる。今すぐ、ただちに命令を下さねばならない。が、退却命令は、カルーガ街道への転進から味方をそらさせることになる。一方、副官について兵站部長が、糧食をどこへ運べばよいかを質問するし、野戦病院長は負傷兵の移し先をたずねる。ペテルブルグからの急使は、モスクワ放棄の可能性などから認めぬ皇帝の親書をもたらすし、総司令官のライバルで、いつも足をすくってやろうと狙っている男（こういう手合いは常にいるもので、それも一人と限らず、数人いるのが普通だ）は、カルーガ転進計画とはまるきり正反對の新しい試案を提言する。総司令官の体力は睡眠と補強とを求めている。褒賞にあぶれた尊敬すべき將軍がぐちを言いにやってくる。住民は防衛を哀願する。地形視察に派遣された將校がもどってきて、前に派遣された將校の話とはまったく反對の報告をする。斥候や、捕虜、偵察を行なった將軍など、敵軍の状況に関するみんなの報告は、まちまちだ。あらゆる総司令官の行動にとまなう、こうした必然的な条件を理解できぬか、忘れるかするのに慣れている人々は、たとえば、われわれにフィーリにおけ

る軍の状況を示して、総司令官は九月一日には、モスクワ放棄か防衛かという問題を、自由に解決できたはずだ、などと想定してみせる。ところが、モスクワから五キロというロシア軍の状況では、そんな問題は起こるはずもなかったのだ。それなら、その問題はいつ解決されたのか？ それはドリリッサでも、スモレンスクでも行なわれていたのであるが、いちばんはつきり感じとれたのが二十四日のシエワルジノと、二十六日のポロジノであり、そしてポロジノからファイリーまで退却する間の毎日、毎時、毎分ごとに解決されていたのである。

三

陣地を視察するためクトゥーゾフに派遣されたエルモローフが、モスクワ近郊のこの陣地ではとても戦えないから、退却せねばならぬと総司令官に告げたとき、クトゥーゾフは無言で彼を見つめた。

「どら、手を出してみたまえ」彼は言って、脈を見るためのようにその手を裏返したあと、言った。「具合がよくないようだな、君。自分が何を言っているか、考えることだね」クトゥーゾフはまだ、戦わずにモスクワの向こうまで退却する可能性があることなど、理解できなかったのである。

クトゥーゾフは、ドロゴミーロフ哨所から六キロはな

れたボクロンナヤ丘で馬車をおり、道ばたのベンチに腰をおろした。おびただし数の將軍たちがまわりをとりかこんだ。モスクワから駆けつけたラストブチン伯爵も座に加わった。この華やかな集まり全体が、いくつかのグループにわかかれ、それぞれの間で、陣地の長所や短所、軍の状況、予想される作戦、モスクワの状態、全般的な軍事問題などを論じていた。べつにそのために召集されたわけではなかったし、そんな名称はついていなかったものの、これが作戦会議であることは、だれもが感じていた。どの会話も一般的な問題の領域内にとどめられていた。かりに個人的なニュースを伝えたり、知ったりする者がいたとしても、その話は小声でささやかれるだけで、すぐにまた一般的な問題に移ってゆくのだった。これらすべての人々の間には、冗談も、笑い声も、いや、微笑さえも見られなかった。だれもが明らかに努力して、どんなむずかしい要求にも応じようと努めていた。どのグループも、仲間うちの話をしながら、総司令官の近くにしようとなつて、総司令官に聞こえるように話すのだった。総司令官は周囲で話されていることに耳を傾け、ときにはき返すこともあったが、自分は話に加わらず、なんの意見も表明しなかった。たいていの場合、どこかのグループの話の話を聞いたあと、まるで彼らの話していること

が自分の知りたいと望むことはまったく違うと言いたげな、失望の色を示して、顔をそらすのだった。あるグループでは、選択した陣地について論じ、陣地そのものより、むしろそれを選んだ人々の知能程度を批判していた。別のグループは、誤りがおかされたのはすでに以前のことであり、戦闘は一昨日せねばならなかったのだ、と論じていた。第三のグループの話題は、サラマンカの戦闘で、それを話しているのは、スペインの軍服姿で到着したばかりのフランス人、クロサールだった。このフランス人は、ロシア軍に勤務しているドイツの皇族の人といっしょに、サラゴサの包囲戦(スペインの都市サラゴサの英雄的な防衛をさす)を分析し、同じようにモスクワ防衛をする可能性を予見しているのだった。第四のグループでは、ラストブチン伯爵が、自分はモスクワの義勇軍とともに首都の城壁の下で散る覚悟でいるが、それでもやはり自分がつんばつんば 棧敷いしにおかれていることを遺憾に思わずにはいられない、もし自分がもっと早くこうと知っていたら、ほかに手の打ちようもあつたらうに、と語っていた。第五のグループは、自己の戦略的判断の深さをひけらかしながら、軍が今後とるべき方向を論じていた。第六のグループは、まるきり無意味なことをしゃべっていた。クトゥーゾフの顔は、ますます心配そうに、憂わしげになつてゆくばかりだった。これらすべての会話から、クト

ゥーゾフは一つのことだけを見てとつた。すなわち、モスクワ防衛は、この言葉の完全な意味において、いかなる物理的な可能性もない、つまり、かりにだれか無分別な総司令官が戦闘の命令を下したとしても、いたずらに混乱が生ずるだけで、結局は戦闘なぞ行なわれぬにちがいないくらい、可能性がないことを見てとつたのである。戦闘が行なわれそうもないというのは、最高の指揮官たちすべてが、この陣地をとうてい考えられぬものと認めているばかりか、自分らの話のなかで、疑う余地のない陣地放棄のあとに生ずることばかりを論じていたからであつた。とうてい考えられぬものとみなしている戦場へ、指揮官たちが自分の軍隊をひきいて行かれるはずがあるだろうか？ 下級指揮官や、兵士たちさえ（兵士として、判断は下すのだ）、やはりこの陣地をとうてい考えられぬものと考えている以上、敗北を確信しながら戦闘におもむくはずはなかつた。いかにベニグセンがこの陣地の防衛をしつこく主張し、他の人たちがいまだにそれを審議していたとしても、この問題はすでにそれ自体としては意義を持たず、議論と駆引きの口実として意味を持つにすぎなかつた。

ベニグセンは、この陣地を選んだため、ロシア人顔負けの愛国心をひけらかし（クトゥーゾフは眉をひそめずには、聞いていられなかつた）、モスクワ防衛を唱えつ

づけた。クトゥーゾフには、ベニグセンの下心が、白日のように明らかにわかつていた。つまり、防衛に失敗した場合は、戦闘もせずに雀ガ丘(現在モスクワ大学のあるレーニン近)まで軍をみちびいてきたクトゥーゾフに責任をおしかぶせるし、成功した場合には自分の手柄にする、もし自説が拒否された場合でも、モスクワ放棄という犯罪に、手を清くしていられる、というわけだ。しかし、そんな駆引きの問題は今や老將軍には関心がなかった。一つの恐ろしい疑問が彼の心をとらえていた。そして、その疑問に対する答えを、彼はだれからも聞けなかった。その疑問とは、今や彼にとって、こういうことだけであった。『本当にこのわたしが、ナポレオンをモスクワまで来させてしまったのだらうか、いったいいつ、わたしがそんなことをしてしまったのだらうか？ 一つそんなことが決まっただか？ 昨日、プラートフに退却命令を出したときだらうか、それともおとといの晩、うとうとしながら、ベニグセンに指揮を命じたときだらうか？ それとも、もつと前か？ それにしても、いったいいつ、こんな恐ろしいことが決まったのだらうか？ モスクワは放棄せねばならない。軍は退却すべきだ、その命令を出さねばならないのだ』その恐ろしい命令を下すのは、彼にしてみれば、軍の指揮を辞退するのと同じことと思われた。彼は権力を愛し、それに慣れていたばかりでなく（トルコで自分

が補佐役をつとめていた当時、プロゾロフスキイ公爵(一七三二—一八〇九)に払われる敬意を見て、苛(の露土戦争でロシア軍總司令官)立ちをおぼえたものだった)、自分がロシア救済の使命をおびているのであり、それ故にこそ皇帝の意に反し、民衆の意志に従って総司令官に選ばれたのだ、と確信してもいた。この困難な条件のなかで軍の先頭にとどまっていられるのは自分一人であり、不敗のナポレオンを恐るる色なく好敵手とみなしうるのは、世界じゅうで自分一人であることを、彼は確信していた。だからこそ、自分が下さねばならぬ命令を考えて、慄然(りつぜん)としたのである。しかし、何かしら決定せねばならなかった。あまりにも自由な性質をおびはじめた周囲の会話を、打ち切らせねばならなかった。

彼は主だった將軍たちをよび招いた。

「わたしの頭が良いにせよ、悪いにせよ、それ以外に頼るものはないのだからね」ベンチから立ち上がりながら、彼は言い、馬車のおいてあるフィーリに向かって馬を走らせた。

四

アンドレイ・サヴォスチャイノフという百姓の、広い、上等なほうの小屋で、二時に会議が召集された。百姓らしい大家族の男や、女、子供たちは、玄関をへだてて、

煙突のない暖炉のついた小屋にごたごたとつめこまれた。

ただ、アンドレイの孫にあたる六歳の女の子、マラーシャだけは、公爵閣下に可愛がられ、お茶のときに砂糖の塊りをもたらしたりしたので、そのまま広い小屋の暖炉の上に残っていた。次々に小屋に入ってきて、上座の聖像の下の幅広いベンチに腰をおろす將軍たちの顔や、軍服や、勲章を、マラーシャは暖炉の上からおっかなびつきり、楽しそうに眺めていた。当のおじいちゃん（マラーシャは内心ひそかにクトゥーゾフをそうよんでいた）、みながら一人だけ離れて、暖炉のかげの暗い一隅に坐っていた。折畳み椅子に深々と身を沈めるように坐って、のべつ唸ったり、ボタンをはずしてはいるものやはり頭をしめつけるらしい軍装フロックの襟を直したりしていた。次々に入ってくる將軍たちが元帥のところを歩みよった。元帥が握手を与える相手もあれば、うなずいてみせるだけの相手もあった。副官のカイサーロフは、クトゥーゾフの正面の窓のカーテンをあけようとしかけたが、クトゥーゾフが腹立たしげに手をふったので、顔を見られるのがいやなのだ、と察した。

地図や、作戰計画や、鉛筆、書類などのついている、百姓家の樅材のテーブルのまわりに、あまり大勢の人間が集まったため、從卒たちがもう一つベンチを運んできて、テーブルのわきに据えた。このベンチには、あとか

ら来たエルモーロフ、カイサーロフ、トリーが坐った。聖像の真下のいちばん上席には、ゲオルギイ勲章を首からさげたバルクライ・ド・トリイが、秀でた額が禿頭と一つにとけ合っている、病人くさい蒼白な顔で坐っていた。すでに二日というもの、熱病に苦しみ、今この瞬間も悪感（おんかん）がして、節々が痛むのだった。その隣にはウヴァーロフが陣取り、みなと同じように低い声で、あわたたしいゼスチュアをまじえながら、何やらバルクライに告げていた。小柄な丸っこいドフトゥーロフは、眉をわずかに吊り上げ、両手を腹に組んで、注意深く耳を傾けていた。向かい側には、目の鋭く光る、大胆な目鼻立ちの幅広い顔に片手で頬杖をついて、オステルマン・トルストイ伯爵が坐り、考えごとをふけている様子だった。ラエフスキイは苛立たしげな表情で、小鬚（こひげ）の黒い髪を慣れた手つきで前に巻きながら、クトゥーゾフを見たり、入口の戸を見たりしていた。コノヴニーツインのきりりとした、端正な、善良そうな顔は、やさしい、いたずらっぽい微笑に輝いていた。マラーシャの視線に出会うと、彼は少女がにっこりせずにはいられぬようなウインクを送ってみせていた。

みなはベニグセンを待っていたのだが、その彼は陣地の新たな視察という口実で、贅沢な昼食を終えようとしているところだった。みなは四時から六時まで彼を待ち、